

# 愛媛アイバンク だより

Ehime Eye Bank Times



目の不自由な方に愛の光を

公益財団法人愛媛アイバンク  
〒790-8585  
松山市三番町4丁目5番地3 愛媛県医師会館内  
Tel.089-913-7786 / Fax.089-913-7817

ホームページへのお越しもお待ちしております。

愛媛アイバンク 検索

URL: <http://www.ehime-eyebank.com/>  
E-mail: [jimukyoku@ehime-eyebank.com](mailto:jimukyoku@ehime-eyebank.com)

# Vol. 29

2016年7月1日発行

## 家族の愛で お世話になった方々への恩返し ～もう一人の人生を…瞳となって～

愛媛アイバンクにおける献眼数は1年あたり10眼程度で推移しています。献眼登録者数は延べ約15,000人で全国的に見ても決して少ない方ではありません。しかし、登録されているご本人が死亡された際、ご家族からの連絡は、ごく一部にとどまっているのが現状です。献眼していただく方を増やしていくためには、ご家族の理解と協力が必要です。その大切さについて実話をもとに物語にしました。

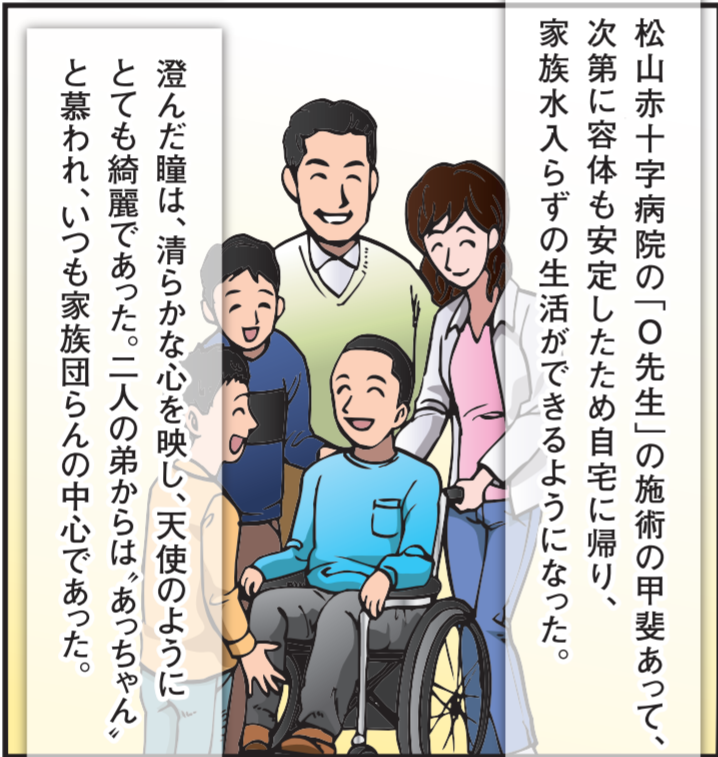


そしてあっちゃんも  
養護学校中等部を卒業した。

40歳になった頃、体調を崩し  
医師の診療が必要となり、  
在宅医療により治療を受けることになった。



10歳になったころ、  
父親の転勤で松山に移り  
赤十字病院に入院した。  
ここでも手術を余儀なくされ、  
生命の危機に直面したが、  
強い生命力で乗り切った。



澄んだ瞳は、清らかな心を映し、天使のようにとても綺麗であった。二人の弟からはあっちゃんと呼び、いつも家族団らんの中心であった。

松山赤十字病院の「O先生」の施術の甲斐あって、次第に容体も安定したため自宅に帰り、家族水入らずの生活ができるようになった。

### 在宅医療とは

通院困難な患者さんが過ごす自宅もしくは施設などに、医療者が訪問して医療を行うこと。

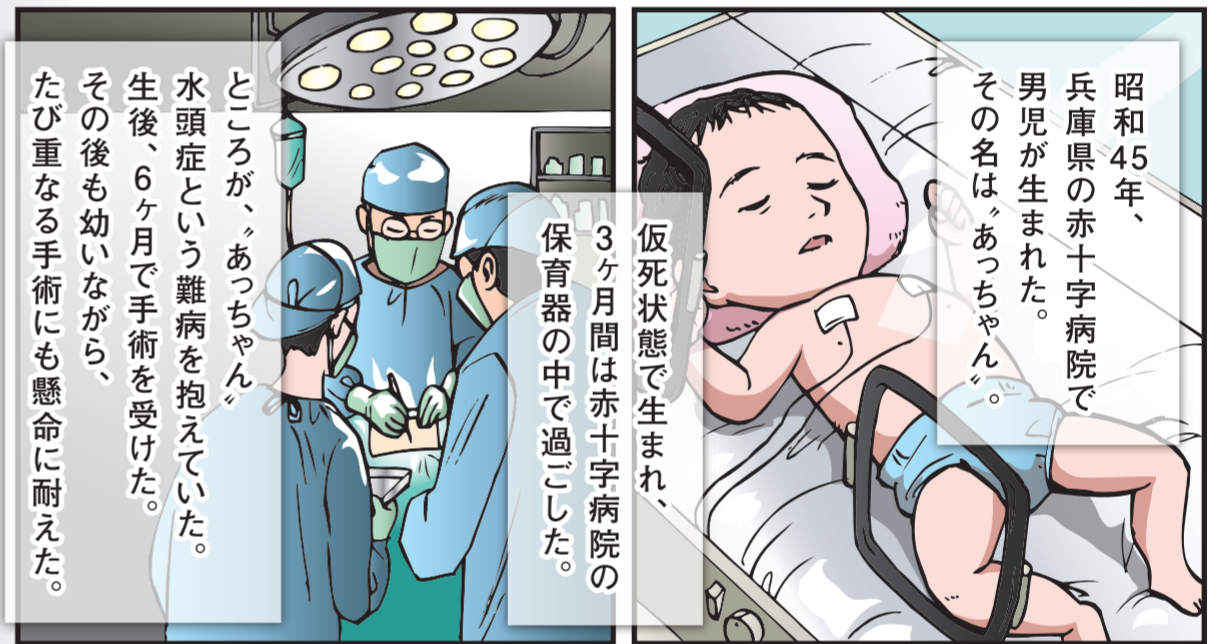
## “あっちゃん”の目は…今、何見てる。

～もう一人の人生を…瞳となって～



夏も近づく5月の  
ある日の夕方、  
在宅医療で  
闘病していた男性が、  
家族に見守られて  
静かに息を引き取った。  
45歳の若さであった。

マンガ / 佐伯ウサギ



昭和45年、  
兵庫県の赤十字病院で  
男児が生まれた。  
その名は、あっちゃん。

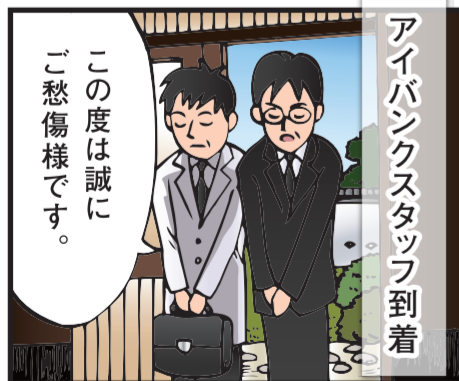
ところが、あっちゃん  
水頭症という難病を抱えていた。  
生後、6ヶ月で手術を受けた。  
その後も幼いながら、  
たび重なる手術にも懸命に耐えた。

仮死状態で生まれ、  
3ヶ月間は赤十字病院の  
保育器の中で過ごした。



アイバンクに  
連絡しましょう。

献眼することに  
します。



この度は誠に  
ご愁傷様です。

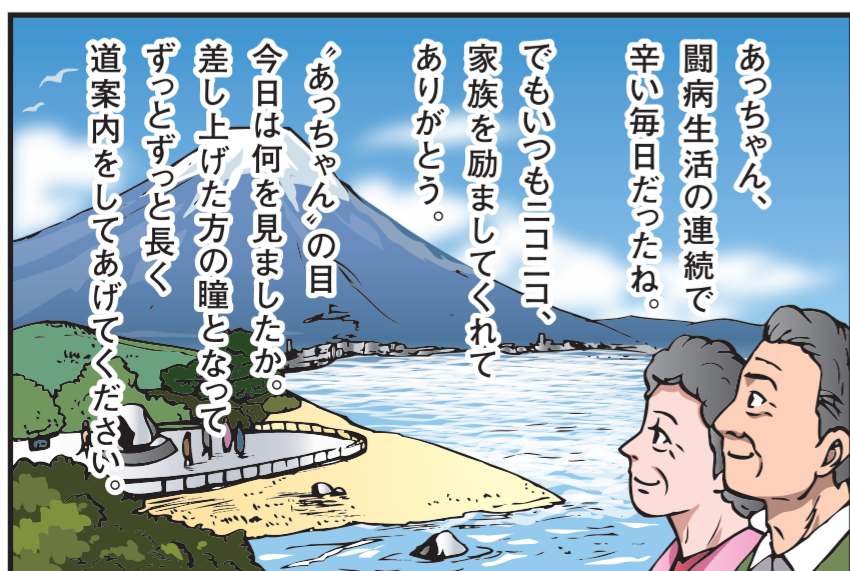
アイバンクスタッフ到着



「ご遺族の意思で  
献眼することができます。」

「本人の意思表示は  
ありませんが、  
献眼することは  
できますか？」

そこで在宅医療のH先生に相談した。



あっちゃん、  
闘病生活の連続で  
辛い毎日だったね。  
でもいつもニコニコ、  
家族を励ましてくれて  
ありがとう。

「あっちゃん」の目  
今日は何を見ましたか。  
差し上げた方の瞳となって  
ずっとずっと長く  
道案内をしてあげてください。

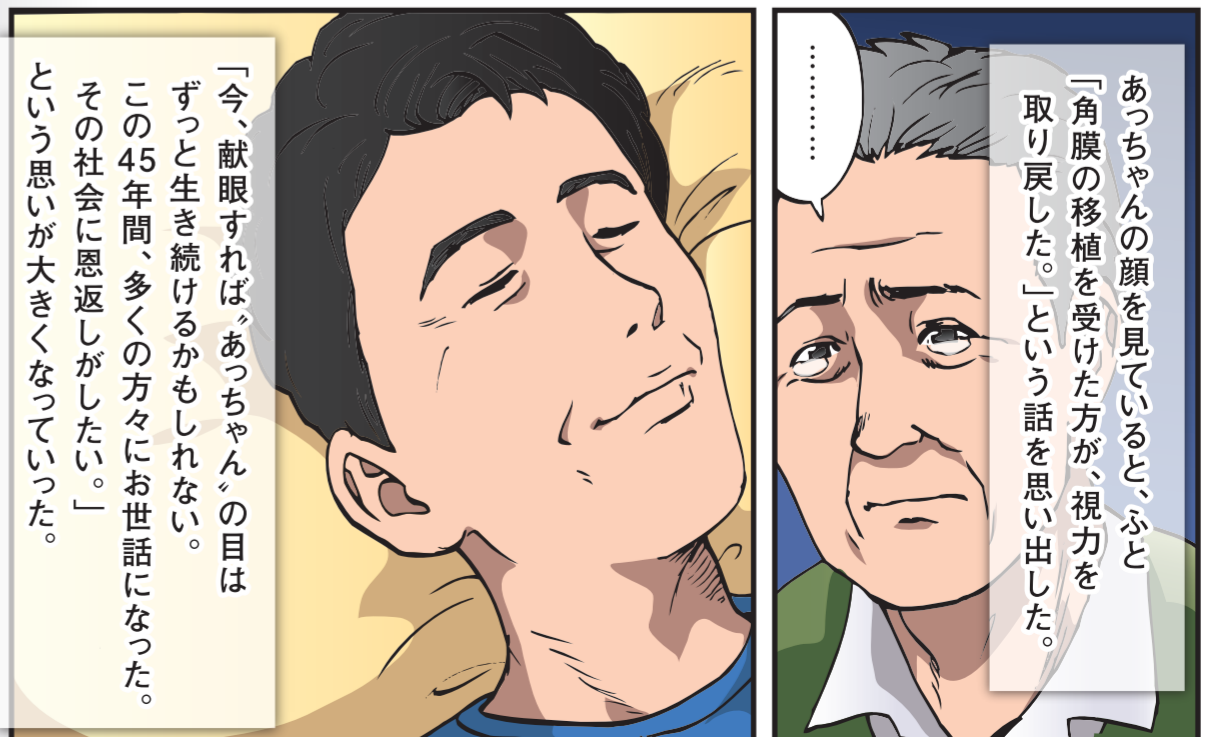


約1時間後  
手術が終わりました。  
これでお二人の方の視力が回復できます。  
ありがとうございます。



そんなある日、  
容体が急に悪化し、  
意識が遠のいてしまった。

家族の看病もむなしく  
2日後、静かに息を  
引き取った。



あっちゃんの顔を見ていると、ふと  
「角膜の移植を受けた方が、視力を  
取り戻した。」という話を思い出した。

「今、献眼すれば、あっちゃん」の目は  
ずっと生き続けるかもしれない。  
この45年間、多くの方々にお世話になった。  
その社会に恩返しをしたい。  
という思いが大きくなっていった。